

2023年7月

課題本 『思い出の作家たち 谷崎・川端・三島・安部・司馬』

ドナルド・キーン/著

新潮社

2019年

◆◆◆7月の読書会から

古代から現代までの日本文学の研究や翻訳に取り組んだドナルド・キーン氏は、『思い出の作家たち』に、日本人の作家5人を挙げています。自分とそれぞれの作家との繋がりやその5人の作家の作品の中からキーン氏の手で選び抜いた作品に解説を加えながら紹介されています。5人の作家とは、谷崎潤一郎、川端康成、安部公房、三島由紀夫そして司馬遼太郎の5人です。

なぜこの5人をキーン氏は選んだのか。それぞれの作家の作品の中から解説している本にキーン氏は何を感じたのだろうか、考えながら「でもあの作品はまだ読んでいない。」「キーン氏の解説を読むとあれもこれも読んでみたくなりました。」何よりキーン氏の文章に感嘆したとの感想が多く出されました。

来月は各人が、キーン氏が選書した本の中から自分の読みたいものを読んで紹介する、竹原読書会恒例の「発展読書会」です。

(文責:伊達悦子)

読書会を終えて

ドナルド・キーンの見た5人

吉川 五百枝

久しぶりに例会へ参加しました。

時間的には、3ヶ月の休暇だったのですが、4月に脳梗塞という壁にぶつかり、一時的に言葉を失ったものですから、なんだか、しぶとくこの世に帰ってきたという感じです。

親しい人達が、「何しに帰ってきた？」とも言わず、予想以上に歓迎してくださいました。この例会でも、大きな花束を頂いて、居心地をよくしてもらいました。ありがとうございます、もうしばらくこの世に居させていただけます。

脳梗塞で、詰まった血管は元に戻りませんが、どこかに迂回路ができたのか、失語していたにもかかわらず、思考回路は連続したままのようです。少しの後遺症が舌の根に残っているだけで、見かけはどこにも麻痺がありません。舌の回転にブレーキがかかって、問えることがあるのも自省のために良いことでしょう。

せっかく脳の働きを一時ストップしていたのに、決して賢くは改造されませんでした。それどころか、老化の進み具合はスピードを上げています。今回のような作品には、「知っている気がするけれど、どんな筋だったかなあ。読んだはずだけどなあ」と脳をかき回しても出てこない名前が多いありさまですが、脳梗塞は「おいらのせいじゃないよ」と言います。はい、わかっています。

著者のドナルド・キーンがここで選んだ 5 人は、年長者として接した谷崎潤一郎(1886 年生まれ)・川端康成(1899 年生まれ)の 2 人と、著者(1922 年生まれ)とも同世代に当たる司馬遼太郎(23 年生まれ)・安部公房(24 年生まれ)・三島由紀夫(25 年生まれ)の 2 つのグループに分けられそうです。

ドナルド・キーンは 2012 年に日本国籍を取得した外国生まれの人物ですが、日本の京都に留学生として住み始めたのは 1953 年です。この年では、谷崎も川端も現存で、留学生の彼には、日本文学の導き手として十分刺激的な存在だったでしょう。

著者が、36 歳年長の谷崎に見たのは、「美しく同時に冷酷なわがままな女」「気品があり、洗練された物腰の日本の伝統美を具現した女」を描く才でした。そのような女人を理想の女人として登場させれば、隷属的な崇拜を旨とするマゾ、サドの人物を配することになります。憧れる美は、爛熟、野性をモットーにしたアブノーマルな人間模様賭してくりひろげられます。谷崎は、もともと西洋かぶれでならしたものの、昔ながらの和に惹かれ、日本回帰の方向をもちました。哲学を語ったりせず、倫理的でもないし、政治的でもなし、世間知や罪悪の分析をせず、と著者は言います。しかし、1943 年、戦時下の風潮に抗して執筆を取りやめることもしています。

そうした谷崎の精緻な文は、〈永遠不変な事象の反映〉を小説の中に残すことだったと著者は見えています。マゾもサドも、永遠不変の人間の事象を描いたのだらうと、改めて「文学」の意味を私は感じました。

著者より 23 歳年長の川端は、1968 年のノーベル賞受賞を機に、世界の川端となりました。ノーベル賞の受賞が決まったとき「彼らは私の文章を読んでは居ないだろう」と呟いたという話が耳に残っています。著者のドナルド・キーンも、日本語を外国語に訳すときの難しさをあちこちに書いていますから、この時の川端の寂しさと諦観に理解をもって接したことでしょう。

超然とした態度、冷静な物腰が投げかける印象は、川端の経歴から窺えるようです。3 歳で両親を亡くし、頼りの祖母も 4 年後に姉も 3 年後になくなります。残された祖父との日々は記憶に無い。そこに愛と嫌悪を見る著者。

「現実と深く触れられぬらしい私」と自らを語る川端が、超俗性と世間から呼ばれる態度も、孤児であるという潜在的な意識がもたらすものかもしれません。

川端は「女性心理の達人」と言われていますが、純血不可侵な女性に美の真髓を描くのは、世間に関わりなく、利害に関わりない人の人生にも共通する題材です。

美しさと悲しみが複雑にからみあう世界を探查する川端の使う日本語は、「美しい日本語」と言われます。曖昧でも、疎通力の可能性に富む言葉のようです。

「美を喚起する天才」とも言われた川端ですが 1972 年に 73 歳で自死しました。

その原因は、様々に言われていますが、私は、敗戦のときの川端が、「魂の自由と安住が定まった」と言ったセリフを、自死の時、同じように呟いたのではないかと思います。

著者と同時代人と括った 3 人は、23 年司馬、24 年安部、25 年三島の生年の故です。文学上ではそれぞれの形が違いますが、3 人が思春期を送った時期が、日本の戦争への足音が大きくなり、やがて敗戦を迎え戦後と呼ばれる動乱期を同時代人として過ごした点において同じだからです。外からの刺激をどのように受け止め、文学として織り込んで行ったかということです。著者の 3 者の選択も、そういう意味も読み取れます。

特に安部と三島は深い交友があったと言われています。

安部は、満州(現在は中国北東部というが、「満州」と表示する)育ちで、日本への憧憬と疎外感を抱いていたとか。

1946年満州から敗戦国の国民として撤退する経験は、軍の蛮行をはっきり安部の脳裏に残しました。国家主義、国家への帰属意識が何を為したかを知った安部は、49年日本共産党に入党します。この世代の作家は、マルクス主義に感化され、左傾の活動が多いとはよく言われていることですが、安部は62年に共産党除名。共産主義というより、党という束縛が肌に合わなかったのかなと思います。人が人を統治しようとするれば何が起きるかは、今も例に事欠きません。

安部の主な仕事を思い出すと、小説と同じ表現方法だという戯曲を思い浮かべます。自然主義的ではなく、演劇空間はことばの人間を生むという意味では前衛小説の部類だと著者はとらえています。前衛小説は、読み手を解放するという面もあって、安部も納得することでしょう。

三島は、45歳の時に自決しました。敗戦後25年が過ぎていました。

自決のニュースが派手に報道されたから、言葉で立つ文士と言うより、社会にモノ申す人のイメージが浮き上がっていました。しかし、著者は「侍として死ぬだけではなく、文士である」という言葉を使って自決を語ります。

「作家であるより、愛国者だと納得させる努力の一端」が「自己催眠」という一連の行動を示した基だと著者は見ます。こういう文言から想起できるのは『仮面の告白』です。「自分が選んだ仮面に、自分の顔を作り替えていく」という態度が合いそうです。三島の「美学」は、念入りに組み上げた努力のそれぞれの一端の集積物というのは私の印象です。

三島は、戦前の右翼の国家主義を危惧していたと言われます。彼の「天皇観」を著者は丁寧にとどめています。自死の方法が目立つものだったから、右翼的社会事件のような雰囲気を持ちますが、三島の心酔した「美」が、倫理観に逆らわせる僧を描いて読み手を解放するのだという著者の目は、三島文学の複雑さを見つけています。

このドナルド・キーンが、「小説家としてよりすばらしい人間として評価する」と記す司馬遼太郎も、国家主義を嫌悪した1人です。

理想都市大阪外大の蒙古語科を卒業した司馬は、軍務経験もあり、その中で見た国家主義という「災いの淵源」を必要としない考え方にひかれています。司馬の作品には徹底した悪人が出てこないという評もありますが、独自性と文化を存続させる可能性を理想とし、日本という國の本質を把握したいという望みを持って小説に向かっていたと著者は考えています。

「国民作家」とも称される司馬ですが、海外において高い評価を受けているようではありません。著者は、その点について「日本人と非日本人の持つ期待が違うからだ」と述べています。司馬は、日本の古典の歴史物語を、実在の人物の実証的史実ではなく、文学的な流れの中にあると捉えました。その流れを司馬の歴史小説の基幹とし、自国の無名の偉大な先人に新たな息吹を与えていったのだと著者は言います。特徴である鮮烈な書きぶりが、その生気を表すとみたのでしょう。

日本文学研究者であるドナルド・キーンは、2008年に文化勲章を受けています。いくつかの大学で日本文学についての研究を進めた後、31歳の時、敗戦後8年経った日本へ留学

して京都に住みました。以来、海外では日本学の権威として高く評価されるようになりますが、日本では、名前の有名さのようにその研究が評価されなかったともいわれています。86 歳になって文化勲章をもらった気持はいかばかりだったのでしょうか。

『源氏物語』に引き込まれ、第二次世界大戦中は軍務として日本軍と戦い、日本語を理解するアメリカ人として日本語研究を選んだドナルド・キーン。

東京とニューヨークを交互に住んだ 35 年の間に、川端、三島、谷崎、安部、司馬など多くの作家と親しくなりました。川端のノーベル賞受賞にも絡んだという記事もあります。

日本人に対して、「自分たちの伝統に興味が無い事は、一つの弱みだと思います」というのも著者の言葉です。

『思い出の作家たち』を読んで

◆【 K子 】

「ドナルド・キーン」名前は知っていましたが、彼がこんなにも一致する考え方をもった研究者とは知りませんでした。彼が日本文化を研究するにあたって好条件が重なったこともラッキーなことだったのかも知れません。

留学先が京都大学・当時(昭和 28 年・1953 年)日本文化を研究する外国人(彼はアメリカ人)が少なかつたこと・京都在住が偶然とは言え文部大臣永井道雄氏から中央公論社の社長嶋中鵬一氏へと…関係がもてたこと。

この本に紹介されたのは五人の作家「谷崎潤一郎」「川端康成」「三島由紀夫」「安部公房」「司馬遼太郎」です。それぞれに公私共に拘りを持ち、両方の面から作品を分析しているのがとても面白く興味深いものがありました。五人の作家の作品解説はまさにバイブル。これも、これも読んでみようと思う程端的にかいしゃくされています。日本へ帰化・文化勲章受章・96 歳で永眠。

私が注目したのはキーン氏の文章、こんな日本語を駆使するなんて…。でもこの様に訳した松宮史郎さんにも満点。

◆【 TK 】

お恥ずかしいのですが、川端康成しか読んだ事はありません。

谷崎潤一郎は、恋と洋風の生活に傾倒した方、川端は日本の美をえがいている。私はファンです。日本の生活の原型、日本語の美しさを表している。川端の小説を読んで他の作家を読んだので、えっ！と言う違和感を感じた。なぜか物足りなくて、ガチャガチャした生活ばかりの近年の作家の小説。ある人の見解で近年の小説は、サド小説だと言う。時代が変わったのね、と諦めた。私の言葉が綺麗な言葉でないことにも失望している。

それにしても川端は、男なのになぜ、女の主人公と女言葉を綺麗に操れるのか？と考えてしまう。

三島は壮絶な人でまるで政治家のようだ。世の中の事を自分でなんとかしたいとか責任があると決めているようだ。今回会の出席されたかたで三島に会った事がある人の話が聞けてとても嬉しかった。いろんな年代の方の会の良さを感じた。

昔のは良かったと言う感想になってしまうが、今自分は何を後世に残せることができるのか考えると何もない。何も考えずに楽しい生活ばかりしているのか、色々考えてしまう。でも、戦争とか自殺とかは無かった方がいい。人にとって良かったと言われる、美しい生き方をしていきたい。

◆【 望月悦子 】

7月の例会で、吉川先生がおっしゃった「時代の流れが人を大きく変える」「日本の歴史の中での5人を見なければ」という言葉が印象に残りました。自分の長年の習性で作品を読むとき、その作家の生育や養育、育った環境について調べて作品を読解するようにしています。今回も、思い出の作家たちの5人をより理解するために自分なりに調べてまとめてみました。

講演でご本人を見たことのある三島由紀夫は、なぜ徹底的に男性、剛健、筋肉などなど求めたのか。おばあちゃん子の養育の内容はどんなものだったのだろうかと興味がわきました。彼は、1925年(大正14年)1月14日現・東京都新宿区四谷において、父・平岡梓(当時30歳)と母・倭文重(当時19歳)の間の長男として誕生しています。家は借家で同番地内で一番大きく、家族(両親と父方の祖父母)の他に女中6人と書生や下男が同居。兄弟は、妹・弟・の3人。父は、一高から東京帝国大学法学部を経て、高等文官試験に1番で合格しており、母は、加賀藩藩主・前田家に仕えていた儒学者・橋家の出身。祖父は内務官僚。祖母は武家の娘で、12歳から17歳で結婚するまで有栖川宮熾仁親王に行儀見習いとして仕え、厳格な女性だったようです。このような家族構成の中、学習院中等科に入学するまで祖母と同居し、幼少期は絶対的な影響下に置かれていた。彼が生まれて49日目に、「二階で赤ん坊を育てるのは危険だ」という口実のもと、祖母は彼を両親から奪い自室で育て始め、母親が授乳する際も懐中時計で時間を計ったとか。祖母は坐骨神経痛の痛みで臥せっていることが多く、家族の中でヒステリックな振る舞いに及ぶこともたびたびで、行儀作法も厳しかった。三島は、物差しやはたきを振り回すのが好きであったが没収され、音の出る玩具も御法度となり、外での男の子らしい遊びも禁じられた。祖母は孫の遊び相手におとなしい年上の女の子を選び、彼には女言葉を使わせた。病弱な彼のため、祖母は食事やおやつを厳しく制限し、貴族趣味を含む過保護な教育。また、主治医の方針で日光に当たることを禁じられていた三島は、日影を選んで過ごしていたため、虚弱体質で色が青白く、当時の綽名は「蠟燭」「アオジロ」中等科でも同級生にからかわれ、屋上から鞆を落とされたり、学食で皿に醤油をドバドバかけられ野菜サラダを食べられなくさせられたりという、イジメをずいぶん受けたようです。その一方、歌舞伎、谷崎潤一郎、泉鏡花などの祖母の好みは強要されていたようで、後年の三島の小説家および劇作家としての素養を培った。三島が学習院に入学したのは、大名華族意識のある祖母の意向が強く働いていたとのこと。自分を主張でき

ない幼少期に、辞典や図鑑が友達で何度も楽しく読んでいたとは。講演を聞いた当時の私は、さすが天才は違うなあと感心していましたがそうだけではない真の背景が理解できました。太宰治と違って、三島の素晴らしい点は理不尽な自分の生い立ちを自分の力で変容していったことだと思います。彼が太宰治を嫌っていたのは「甘えるな」ということでしょうか。彼の死後、我が子の成人まで誕生祝を予約していたなんて彼の父親としての愛情なんだと思うと切ない。なお、三島の文学活動に父親は猛反対している状況を案じて、文学仲間が「三島」を通して上京したと富士の白雪をみて「ゆきお」とペンネームを思い浮かべたとのこと。

5人の作家の中では、一番谷崎が好きです。自分をさらけ出し、自分に忠実な性格が好きなのです。その谷崎潤一郎は、1886年四男三女の長男として東京都日本橋区人形町で生まれています。一代で財をなした祖父のもと、6歳頃は神童と持て囃されるが、お坊ちゃん育ちで内気な性格のため、乳母の付き添いがなく登校できなかった。1894年(8歳)明治地震にて被災。それがトラウマとなり生涯悩まされた地震恐怖症となる。祖父死後事業がうまくいかず、谷崎が尋常小学校四年を卒業するころには身代が傾き、15歳頃には上級学校への進学も危ぶまれた。谷崎の才を惜しむ教師らの助言により、住込みの家庭教師をしながら現・日比谷高等学校に入学することができ、成績優秀で「神童」と言われるほどだった。本人は「文章を書くことは余技であった」と回顧しているそうだ。編入試験(飛び級)合格しながら旧制一高卒業・東大国文科を入学するも学費未納により中退している。在学中に小説『刺青』(1910年)を発表。早くから永井荷風によって激賞され、谷崎は文壇において新進作家としての地歩を固めながら、自然主義文学全盛時代にあつて物語の筋を重視した反自然主義的な作風で文壇の寵児となっている。私生活においては、1921年(35歳)妻・千代の譲渡の約束を翻し佐藤春夫と絶交。1930年(44歳)には、三者合意で妻の千代と離婚し、千代は佐藤春夫と結婚。挨拶状が送られ、「細君譲渡事件」と騒ぎになる。その後、1931年(45歳)古川丁未子(24歳)と結婚。2年後離婚その間「春琴抄」を完成させ、その後人妻だった根津松子と結婚「細雪」を完成させています。谷崎は妻を変えるごとに転居するごとに作品が生まれています。「春琴抄」の奉公人佐助も谷崎家の家業が傾いた時丁稚奉公に出なければならない時があつたが、周囲の協力で書生となって家庭教師をしています。こういう体験からも作品の発想を生み出しているのでしょうか。また、最愛の終生の妻となった松子との体験も「細雪」の素地となってほとんどが実生活であつたようです。谷崎の作品には好色が多いとされていますが、彼自身は人間的で実直な性格に好感が持てます。

川端康成は1899年に大阪で生まれ、旧家育ちの開業医だった父と、資産家の令嬢であつた母の間の長男として誕生しています。姉も含めた一家四人で、大阪市の現在の天神橋で暮らしていました。しかし、川端の父親は肺を患い、母親も父親と同じ病に侵されていました。そのため彼自身も、七か月という早産で、身体も小さく未熟だったようです。彼が二歳になる前に父が、三歳になる前に母が病で亡くなっています。その後は、姉は母の妹夫婦に、彼は父方の祖父母に引き取られ、兄弟は離れ離れに育つたようです。幼い頃に両親を亡くした川端は、命というものの儚さを知ることになり、また、両親への憧憬の念を強め、それが後世の作品にも色濃く影響を与えることになったと言われています。川端自身も、作家として後に受けたインタビューで、幼少期の経験は自身の心に一種の虚無感のようなものを抱か

せ、また、それによって後に経験した様々なことが、自分の感性を育てたといっています。1906年(7歳)大阪府三島郡の尋常高等小学校に入学するも、虚弱体質のため、欠席がちではあったが、成績はよく、作文などの才能を発揮。育ててくれた祖母が亡くなる。1910年(11歳)高等小学校を卒業。大阪府立茨木中学校に入学。姉を亡くし、肉親は祖父だけとなる。この頃から体質が改善され、欠席もなくなり一里半(五キロ)を徒歩で通学できるようになる。1914年(15歳)作家を志望する気持ちが強くなり、文芸雑誌を読み漁り、短歌に俳句、作文などの制作活動に励む。祖父が亡くなり、寄宿舎に入ることになる。肉親の愛情に縁のなかった川端の寂し気な雰囲気は分かるようになりました。

安部公房は1924年(大正13年)北海道開拓民の両親の二男二女の長男として、東京都北区西ヶ原で誕生。満洲医科大学の医師であった父は勤務先から一時出向していた東京で公房の母親と結婚。翌年、母は公房を妊娠中に唯一の小説『スフィンクスは笑う』(異端社)を上梓しますが、以後は一切の筆を折ったようです。1925年(大正14年)、生後8ヵ月の安部は家族と共に満洲に渡り、奉天の日本人地区で幼少期を過ごす。小学校での実験的な英才教育「五族協和」の理念は、後に安部の作品や思想へ大きな影響を及ぼした。1940年(昭和15年)、中学校を4年で飛び級して卒業。日本に帰国し成城大学理科乙類に入学。ドイツ語教師からの影響で戯曲や実存主義文学を耽読する。在学中高木貞治の『解析概論』を愛読し、成城始まって以来の数学の天才と称された。同年冬に、軍事教練の影響で風邪をこじらせ肺浸潤を発症。一時休学し、奉天の実家に帰り療養。回復を待って1942年(昭和17年)4月に復学。1943年(昭和18年)3月、戦時下のため繰上げ卒業。同年10月、東京帝国大学医学部医学科に入学。1945年(昭和20年)、奉天で開業医をしていた父の手伝いをしていた頃に召集令状が届くが、入営前に8月15日の終戦を迎えた。同年冬発疹チフスが流行して、診療にあたっていた父が感染して死亡する。1946年(昭和21年)、敗戦のために家を追われ、奉天市内を転々としながらサイダー製造などで生活費を得る。同年の暮れに引き上げ船にて帰国。北海道の祖父母宅へ家族を送りとどけたのち帰京する。以後、安部は中国を再訪することはなく、小説家としても満洲における体験を書くことはなかった。敗戦後の中国での生活、引き上げ船での様子などから筆舌に尽くしがたい生活であったろうと考える時、歴史の中で翻弄された人生はいかばかりであったろうかと想像できます。「砂の女」重たくてしんどい小説ですが読み応えのある作品だと思います。

司馬遼太郎は、1923年(大正12年)8月大阪市浪速区に薬剤師の父親と母親の次男として誕生。兄がいたが2歳で早世し、姉、妹の3人兄弟。乳児脚気のために3歳まで奈良県北葛城市の母の実家に里子に出されていた。1930年(昭和5年)、大阪市の尋常小学校に入学。性格は明るかったが、学校嫌いで、悪童でもあったようである。母の実家の周りには古墳が多く、土器のかけらや石鏃などを拾い集めていた。1936年(昭和11年)、私立上宮中学校に進学。入学後の成績は300名中でビリに近く本人も驚いたらしいが、慌てて勉強をしたら二学期には上位20位に入ったという。図書館に通うようになり、大阪外国語学校卒業まで本を乱読するようになる。古今東西のあらゆる分野の書物を読破し、しまいには釣りや将棋などの本まで読んだという。いつも立ち読みばかりするので頭にきた売場場の主任が「うちは図書館やあらへん！」と文句を言うと、「そのうちこらの本をぎょうさん買ったりしますから…」と言ったそうである。また、1939年(昭和14年)、中学生だった司馬にも日中戦争や第

二次世界大戦が影を落としており、上宮中学の配属将校から学校教練を受けている。司馬少年は学校が嫌いで、図書館と本屋さえあれば人間はそれでいいと考えていたが、仕方なく通学し学校で社会訓練を受けているうちに、中国人と朝鮮人に好感を抱くようになった。好きになった理由は、「彼らは非常に人間というものを感じさせた」からであったとしている。1942年(昭和17年)4月に大阪外国語大学外国語学部モンゴル語専攻に入学。当時の学生の大半がそうであったように語学が嫌いで、早稲田大学の中国文学に鞍替えしようかと考えたこともあった。しかし読書は依然として好み、ロシア文学や、司馬遷の『史記』を愛読。「中庸の徳」が座右の銘であったという。敗戦にショックを受けた司馬は、戦争の愚かさに憤りを痛感し「なんとくだらない戦争をしてきたのか」「なんとくだらないことをいろいろしてきた国に生まれたのだろう」との数日考えこみ、「昔の日本人は、もう少しましだったのではないか」という思いが、後の司馬の日本史に対する関心の原点となり、趣味として始めた小説執筆を、綿密な調査をして執筆するようになったとのこと。司馬の性格や博学の背景が理解できました。特に、明治の群像を描いた『坂の上の雲』、明治初期の『翔ぶが如く』や、江戸後期の『菜の花の沖』は読みやすく私の好きな小説でもあります

吉川先生がおっしゃった「時代が人を大きく変える」「歴史の流れの中で人を見る」の言葉通りでした。私の従来の習性(生育・養育・環境を考慮すること)に「時代背景」も追加することの需要さがわかりました。今回の感想文は精力を使い果たしましたが、こういうまとめ方も面白いと思いました。次回の課題は谷崎の「少将滋幹の母」を読みたいと思っています。

◆【 MM 】

谷崎潤一郎 1886……………1965(79歳)

川端康成1899……………1972(72歳)

三島由紀夫1925……………1970(45歳)

安部公房1924……………1993(68歳)

司馬遼太郎1923……………1996(72歳)

ドナルド・キーン1922……………2019(96歳)

今月の課題本は作者と5人の小説家の交流、作品やエピソード紹介など文庫のなかに興味を引く要素が詰まったものだった。

読書会で私は「それぞれ5人の作家をリアルタイムで知らない」と言ってしまったが、5人の生年と没年を並べてみると安部と司馬は私が20代の頃没しているのではないか。知らないというのは作品に触れてなかっただけだ。同じ時代に生きていたのにもったいない。

それぞれの作家について深く知らなかったので、作者が語る5人について驚くことも多かったが知らないがゆえに素直に反応することができた。初対面のとき谷崎に『細雪』に書かれた出来事について聞いた作者に対してほとんど実際に起こったことだと谷崎が断言したこと、ノーベル文学賞は三島ではなく川端が受賞したいきさつ、三島が自殺直前に作者にあてた手紙の内容、安部とは初対面ではいい印象を相手に与えることができなかったが共通の友人である大江健三郎のとりなしでかなり親しくなり安部の晩年まで関係が続いたこと、司馬との

出会い(対談)での作者自身が感じた語彙力のなさ、対して司馬の知識の豊富さに最初圧倒されたが、それと同時に司馬の思慮深さに触れたことなど作者が実際に作家たちと交流したことで書けたエピソードがちりばめられていた。作品の解説だけにとどまっていなかったのを読んでいて自分があたかも作家たちと交流をもてたような感覚をもった。

作者が5人の作家と交流をもつことで得られたことは普通に暮していると経験できないことだ。作品から感じたことを実際に作者に確かめることができる。確かめるまではいかなくても会って話し、手紙などのやり取りから作品に込められた作者のその時の考えなどを時間を置かず触れることができる。これらのことが作品へのさらなる理解へつながると私は思う。その贅沢な経験を本にして私たちに手渡してくれた。『思い出の作家たち』は1冊の中に5人の作家が取り上げられているが、三島に関しては彼だけ扱う1冊を作るのも可能なのでは？と思うほど内容も濃かったしまだまだ知りたいと思った。

今月は吉川先生が久しぶりに参加されて会での意見交換もいつも以上に活発になった。読書会当日は「あ〜今日も得るものがたくさんあった！今月は感想文として書きたいことがたくさん！」と思っていたのに鉄は熱いうちに打たないとすぐ冷めてしまう、忘れてしまう。感想文をまとめる段になってもうまく言葉にできない。できないなりにもがいて書く。スムーズに書ける月の方が少ないけれどもまとめた後はスッキリした気持ちだ。そしてみんなが書いた感想文を読むことも大きな楽しみだ。それを読んで次月の読書会の始めに振り返りとして語りあう。大人になってからの毎月の宿題を与えられる機会ありがたい。みんなで集まって語り合う場があるのも本当にありがたい。狭い世界を広げてくれるからだ。価値観の世界、表現の世界。ここまでという終わりが無いのでこれからも楽しみながら自分の世界を広げていきたい。